

東京大学ヒューマニティーズセンター 第12回オープンセミナー

Policing Intimacy and Queering the History of the South Asian Overseas Migration in the Colonial Era

(歴史をクィア化する：監視される植民地期南アジア系海外移民の親密性)

▶ 2019年6月21日（金）17:00 - 19:00

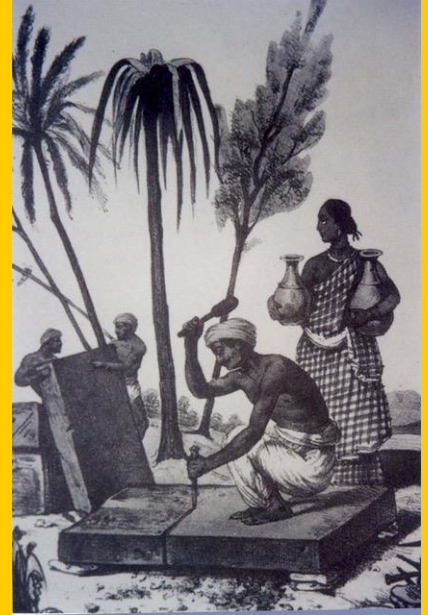
入場無料 | 事前登録不要

▶ 東京大学 伊藤国際学術研究センター3階 中教室

報告者：Crispin Bates（東洋文化研究所・特任教授）

コーディネーター：池亀彩（情報学環・准教授）

使用言語：英語（一部、日本語）



【概要】

19～20世紀の南アジア系移民の歴史を脱植民地化するには、まずナショナリストと植民地主義者との間の対立する歴史解釈という図式に挑戦することから始めなければならない。さらにインド人ディアスポラに関する記述が前提としている異性愛規範にもまた挑戦しなければならない。南アジア系移民労働者たちは、様々な人種やジェンダーに属するパートナーを選択するというエージェンシーを行使したが、そうした行為ゆえにしばしば不道德な存在であるとみなされた。これゆえに労働移民（特に年季契約労働移民）たちは墮落していて、改善されるべき対象だと性格づけられたのだ。これに呼応して、植民地政府は、悪名高いインド刑法第377条や「誘惑」を禁止する様々な法によって、移民たちの中の親密な関係を規制し、異性間の婚姻のみを承認し、異人種間の通婚を妨げ、同性間の性的関係を罰するようになった。しかしながら、このような努力はそれほど効果的ではなかった。なぜなら、南アジア系移民たちの中の社会的・情緒的な関係性は混乱するほど多様であったし、植民地の役人たちは（セクシャリティの）差異を認識できるほど優秀でもなく、またそもそも植民地統治は表面的なものであったからである。この発表では、1850年代から1930年代のマレー半島などからの事例を用いて、こうした移民の間における性と管理の問題を議論する。